

経験年数別にみた研修に対する保育士の意識

— 管理職との相違点と共通点を踏まえて —

青井 夕貴・矢藤誠慈郎*・森 俊之**・石川 昭義**・西村 重稀**

(2015年4月3日受理)

1. 目 的

現在、保育所保育指針では、保育士の資質向上を図るために「職員は、子どもの保育及び保護者に対する保育に関する指導が適切に行われるように、自己評価に基づく課題等を踏まえ、保育所内外の研修等を通じて、必要な知識及び技術の修得、維持及び向上に努めなければならない。」と示されている。研修はひとつの方法であり、あくまでも職員自身の自己評価や明確化された課題に基づいて研修を位置づけ、体系的に資質向上や課題解決を図っていくことが必要とされている。さらに、研修の実施については、職員個人の責務だけではなく、施設長の責務としても求められている。

このような状況を背景とし、保育士を対象とした研修が数多く企画・実施される中で、保育士が効率よく研修を受け、資質向上につなげるためには、研修を取捨選択する必要があるだろう。その際、自身の獲得している資質・能力や自身の置かれている状況を考慮しながら研修を選ぶことが求められると考える。

一方で、研修の選択には、保育士自身の希望だけではなく、所長・主任（以下、管理職）のすめによる選択もある現状を踏まえると、保育士と管理職との間に資質・能力の評価の違いが生じる場合、保育士が求める研修と管理職が求める研修にも違いを生む可能性が考えられる。

さらに、保育士の資質・能力は、経験を積むことによって変化することも多く、経験年数別に

る資質・能力の評価と研修に対する意識の特徴を明らかにすることによって、研修を選択する際の一指標となるかもしれない。しかし、保育士の資質等に基づいた研修や経験年数に焦点を絞った研究（野坂ら、2006；若山、2008）は限られている。そこで、本研究では、①保育士が評価する自身の資質・能力と管理職が評価する保育士の資質・能力の相違点や共通点を経験年数別に明らかにする、②それを踏まえて、保育士が希望する研修と管理職が求める研修の相違点や共通点を経験年数別に明らかにすることを目的とした。

2. 方 法

1) 対象者

A県内の保育所275ヶ所において、それぞれ管理職（所長あるいは研修を統括している管理職）および経験年数が1～3年、4～9年、10年以上の保育士各1名ずつを対象とし、アンケート調査を行った。ただし、各経験年数に該当する保育士がいない場合は、回答は不要とした。275ヶ所のうち222ヶ所からの返送があった（回収率80.1%）。

2) 調査内容

管理職用では、回答者の属性をはじめ、管理職として、経験年数が1～3年の保育士、4～9年の保育士、10年以上の保育士に対して、「現在身についていると思うこと」、「現在不足していること」、「受講してほしい研修の内容」を、それぞれ「保

*岡崎女子大学 **仁愛大学

育に関する法制度や施策」、「食事や栄養に関すること」、「遊びに関すること」など予め設定した20項目（表4・5参照）から5項目を選択する内容であった。さらに、「現在身についていると思うこと」は身についていると感じる順に1～5の番号を、「現在不足していること」は不足していると感じる順に1～5の番号を、「受講してほしい研修の内容」は受けてほしい順に1～5の番号を記入する形式にした。

保育士用では、回答者の属性をはじめ、「現在身についていると思うこと」、「現在不足していること」、「これまでに受講した研修の内容」、「これから受講する必要がある研修の内容」について、管理職用と同様に20項目を設定し、回答形式も同じ設問内容とした。

3) 手続き

平成26年9月に、A県保育士会の会合にて、各地域の代表者に対して趣旨説明等を行い、園ごとに、調査依頼状、管理職用調査用紙1部、保育士用調査用紙3部、返信用封筒を準備し、代表者を通じた各園への配付とした。回答後は、園ごとにまとめて返信用封筒にて郵送とした。

3. 結果

1) 回答者の属性

回答者の年齢別人数を表1に示した。管理職は、50代が最も多く、保育士（経験年数1～3年）は20代、保育士（経験年数4～9年）も20代、保育士（経験年数10年～）は30代が最も多かった。性別は、管理職と保育士共に9割以上が女性であった。勤務先としては（表2）、管理職では公立がやや多く、保育士（経験年数1～3年）では同数、保育士（経験年数4～9年）では私立の方がやや多く、保育士（経験年数10年～）では公立の方がやや多かった。その他には、公設民営などが含まれていた。

表3には、管理職の役職別の人数を公立・私立にわけて示した。役職は、公立・私立共に園長が最も多く、主任の多くは公立であった。管理職の経験年数では、5年未満が最も多かった。保育士の職

務形態としては、いずれの経験年数においても、正規職員がほとんど（約9割）であった。

表1. 回答者の年齢（人）

	管理職	保育士		
		1～3年	4～9年	10年～
20代	10 (0.5%)	147 (92.5%)	158 (81.0%)	8 (3.3%)
30代	10 (4.9%)	9 (5.7%)	30 (15.3%)	119 (49.0%)
40代	36 (17.6%)	2 (1.3%)	6 (3.1%)	84 (34.6%)
50代	128 (62.7%)	1 (0.6%)	1 (0.5%)	32 (13.2%)
60代以上	29 (14.2%)	0	0	0
合計	204	159	195	243

表2. 回答者の勤務先（人）

	管理職	保育士		
		1～3年	4～9年	10年～
私立	88 (43.1%)	78 (49.0%)	101 (51.8%)	107 (44.0%)
公立	105 (51.5%)	78 (49.0%)	89 (45.6%)	127 (52.3%)
その他	9 (4.4%)	3 (1.9%)	5 (2.6%)	6 (2.4%)
無回答	2 (1.0%)	0	0	3 (1.2%)
合計	204	159	195	243

表3. 回答者（管理職）の役職（人）

	公立 (n=88)	私立 (n=105)	その他	無回答	計
園長	47	97	5	1	150
副園長	7	4	0	0	11
主任	32	3	2	0	37
その他	0	1	2	0	3
無回答	2	1	0	0	3

2) 管理職からみた保育士の資質及び研修に対する意識

表4には、管理職が各経験年数の保育士に対して「現在身についていると思うこと」、「現在不足していること」、「受講してほしい研修の内容」で

「1」と回答した人数の割合を示した（最も高い数値に網かけをしている）。

管理職が1～3年の保育士と4～9年の保育士に対して、「現在、身についている」と思っているとして「遊びに関すること」が最も高かった（1～3年で42.6%、4～9年で35.8%）。10年以上の保育士に対しては「子ども理解、子どもとの関わり方に関すること」（31.4%）の選択率が最も高かった。つまり、経験年数が増えるほど選択率は低くなっていた。

管理職が保育士に「現在、不足している」と思っている項目としては、すべての経験年数の保育士において「保育に関する法制度や施策」の選択率が最も高かった（1～3年で24.0%、4～9年で30.4%、10年以上で40.7%）。つまり、経験年数が増えるほど選択率が高くなっていた。

管理職が「受講してほしい研修」として最も選択率が高かったのは、1～3年の保育士と4～9年の保育士には「子ども理解、子どもとの関わり方に関すること」（1～3年で33.8%、4～9年で21.1%）、10年以上の保育士には「保育に関する法制度や施策」（17.6%）であった。同じく「受講してほしい研修」でも、経験年数が増えるほど選択率は低くなっていた。

3) 保育士からみた自身の資質及び研修に対する意識

表5には、各経験年数の保育士が「現在身についていると思うこと」、「現在不足していること」、「受講したい研修の内容」で「1」と回答した人数の割合を示した（最も高い数値に網かけをしている）。

1～3年の保育士が「現在、身についている」と思っている項目は「遊びに関すること」（34.6%）、4～9年の保育士と10年以上の保育士は「子ども理解、子どもとの関わり方に関すること」（4～9年で39.0%、10年以上で38.7%）が最も高かった。つまり、経験年数が4～9年で選択率が最も高くなっていた。

すべての経験年数の保育士において「現在、不足している」と思っている項目として、「保育に関する法制度や施策」の選択率が最も高かった（1～3年で18.9%、4～9年で35.4%、10年以上で46.1

%）。つまり、経験年数が増えるほど選択率が高くなっていた。

保育士が「受講したい研修」として最も選択率が高かったのは、1～3年の保育士では「子ども理解、子どもとの関わり方に関すること」（20.1%）、4～9年の保育士では「特別な配慮を必要とする子どもに関すること」（22.6%）、10年以上の保育士では「保育に関する法制度や施策」（17.3%）であった。つまり、経験年数が4～9年で選択率が最も高くなっていた。

4) 保育士の資質に対する評価と研修に対する意識

まず、「現在身についていると思うこと」、「現在不足していること」、「受講してほしい（受講したい）研修の内容」において、1～5を記入した人数を各項目で合計し、「現在身についていると思うこと」かつ「受講してほしい（受講したい）研修の内容」を選択した人数の割合、「現在不足していること」かつ「受講してほしい（受講したい）研修の内容」を選択した人数の割合を算出した。その後、それぞれ管理職から保育士を引いた差分を、経験年数別に図1～6に示した。

管理職が経験年数1～3年の保育士に身についていて、かつ受講してほしいと思う内容では、「子ども理解、子どもとの関わり方に関すること」が最も多かった（32.4%）。経験年数が4～9年の保育士に対しても同様であった（27.5%）。経験年数が10年以上の保育士に対しては、「保護者理解、親との関わり方に関すること」が最も多かった（19.6%）。

一方、管理職が経験年数1～3年の保育士に不足していて、かつ受講してほしいと思う内容では、「安全管理や危機対応に関すること」が最も多かった（27.0%）。経験年数が4～9年の保育士に対しても同様であった（23.0%）。経験年数が10年以上の保育士に対しては、「保育に関する法制度や施策」が最も多かった（39.2%）。

すべての経験年数の保育士において、自分に身についていて、かつ受講したいと思う内容では、「子ども理解、子どもとの関わり方に関すること」が最も多かった（1～3年が46.5%、4～9年が50.8%、10年以上が29.2%）。

表4. 各経験年数の保育士に対して、管理職が最も感じている項目別の割合(%)

管理職	現在、身につけている			現在、不足している			受講してほしい研修		
	1～3年	4～9年	10年～	1～3年	4～9年	10年～	1～3年	4～9年	10年～
1. 保育に関する法制度や施策	0.0	0.0	0.5	24.0	30.4	40.7	2.0	5.9	17.6
2. 保育の意義や理念、保育所の社会的役割	2.5	1.5	3.4	2.5	5.4	5.4	4.4	6.4	6.4
3. 現代の子育て事情や社会状況	0.0	0.5	0.5	3.4	4.9	2.0	1.5	3.4	3.4
4. 子ども理解、子どもとの関わり方に関すること	12.7	24.0	31.4	7.8	2.5	0.5	33.8	21.1	3.4
5. 保護者理解、親との関わり方に関すること	0.5	2.9	4.9	3.9	5.9	0.0	5.9	11.8	7.4
6. 特別な配慮を必要とする子どもに関すること	1.0	2.0	2.5	4.9	2.5	1.0	2.0	7.8	6.4
7. 食事や栄養に関すること	0.0	0.5	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5
8. 保健や病気に関すること	1.5	1.5	1.0	0.0	0.5	0.0	0.5	0.5	0.0
9. 安全管理や危機対応に関すること	1.0	0.5	1.5	11.3	6.4	3.9	9.3	9.3	12.3
10. 遊びに関すること(手遊び、製作、歌など)	42.6	35.8	23.0	2.0	0.5	0.5	9.8	1.5	0.5
11. 相談(カウンセリング)に関すること	0.0	1.5	2.0	2.9	2.9	2.5	0.0	2.0	1.0
12. 小学校との連携に関すること	0.0	0.5	0.0	0.0	0.5	3.4	0.0	0.0	2.5
13. 他の専門機関や団体との連携に関すること	0.0	0.0	0.0	0.5	2.5	2.5	0.0	1.0	1.0
14. 地域社会の資源活用に関すること	0.0	0.5	0.0	0.5	1.5	4.9	0.0	0.5	1.5
15. 職員間の協働(チームワーク)に関すること	4.9	3.4	4.4	2.0	1.5	1.5	2.5	4.4	5.9
16. リーダーシップに関すること	0.0	0.5	2.9	0.0	7.8	12.7	0.0	2.5	16.2
17. 乳児・低年齢児保育に関すること	3.4	3.9	4.9	2.5	0.0	0.0	3.9	1.5	0.5
18. 行事の企画・運営に関すること	2.0	3.9	8.8	1.0	0.5	1.5	0.0	0.5	1.0
19. 保育課程の編成、指導計画の作成に関すること	0.0	1.5	3.9	2.9	3.9	2.9	2.0	5.4	3.9
20. 自己評価や第三者評価に関すること	0.0	0.0	0.0	2.0	2.5	6.9	0.0	0.5	2.9
21. その他	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.5	0.5	0.5
22. 無回答等	27.9	15.2	4.4	25.5	17.6	6.9	22.1	13.7	5.4

表5. 各経験年数の保育士が最も感じている項目別の割合(%)

保育士	現在、身につけている			現在、不足している			受講したい研修		
	1～3年	4～9年	10年～	1～3年	4～9年	10年～	1～3年	4～9年	10年～
1. 保育に関する法制度や施策	0.0	0.0	0.0	18.9	35.4	46.1	2.5	3.6	17.3
2. 保育の意義や理念、保育所の社会的役割	3.8	2.6	1.6	1.9	0.5	2.5	0.6	4.6	1.6
3. 現代の子育て事情や社会状況	3.1	2.1	3.7	3.1	1.5	0.8	5.0	3.1	5.3
4. 子ども理解、子どもとの関わり方に関すること	30.8	39.0	38.7	4.4	1.0	0.8	20.1	19.5	9.9
5. 保護者理解、親との関わり方に関すること	0.6	0.0	1.6	8.2	7.2	1.2	8.8	9.2	11.5
6. 特別な配慮を必要とする子どもに関すること	1.9	1.5	2.1	10.1	7.7	2.5	17.6	22.6	13.2
7. 食事や栄養に関すること	0.6	1.5	0.8	0.6	2.1	0.8	0.0	1.5	0.4
8. 保健や病気に関すること	2.5	1.0	1.2	3.8	1.5	0.0	3.1	3.1	0.8
9. 安全管理や危機対応に関すること	0.0	2.6	0.8	3.8	0.5	0.8	3.1	1.5	4.1
10. 遊びに関すること(手遊び、製作、歌など)	34.6	37.4	27.2	3.8	0.5	0.4	16.4	14.4	6.2
11. 相談(カウンセリング)に関すること	0.0	0.0	0.4	7.5	3.1	4.1	3.1	3.1	6.2
12. 小学校との連携に関すること	0.0	0.0	0.4	4.4	9.7	1.2	1.3	3.1	3.3
13. 他の専門機関や団体との連携に関すること	0.0	0.0	0.0	5.7	6.2	3.3	0.6	1.0	2.5
14. 地域社会の資源活用に関すること	0.6	0.0	0.4	1.3	4.1	12.3	0.0	0.0	1.6
15. 職員間の協働(チームワーク)に関すること	5.7	7.7	6.2	2.5	0.0	1.2	0.6	1.0	4.5
16. リーダーシップに関すること	0.0	0.0	1.6	4.4	7.7	7.0	1.9	0.0	2.5
17. 乳児・低年齢児保育に関すること	6.3	3.1	5.3	4.4	7.2	1.2	7.5	4.6	2.5
18. 行事の企画・運営に関すること	1.3	1.0	2.1	3.8	0.5	0.4	0.6	1.0	0.8
19. 保育課程の編成、指導計画の作成に関すること	0.6	0.0	0.8	5.0	1.5	2.9	1.9	0.5	2.1
20. 自己評価や第三者評価に関すること	0.6	0.0	0.0	1.3	1.5	6.6	1.9	0.5	0.0
21. その他	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
22. 無回答等	6.9	0.5	4.9	1.3	0.5	3.7	3.1	2.1	3.7

一方、1～3年の経験年数の保育士が自分に不足していて、かつ受講したいと思う内容では「保護者理解、親との関わり方に関すること」と「特別な配慮を必要とする子どもに関すること」が最も多かった（29.6%）。経験年数が4～9年の保育士では「特別な配慮を必要とする子どもに関すること」（24.6%）、10年以上の保育士では「保育に関する法制度や施策」（34.6%）が最も多かった。

現在身についていて、かつ受講してほしい・したい

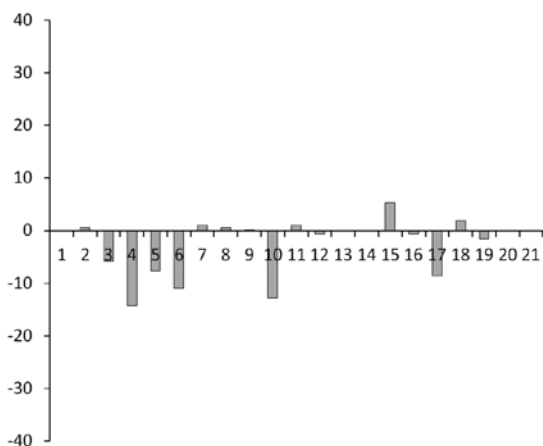


図1. 「現在身についている」×「受講してほしい・したい」における管理職と保育士の差分（経験年数が1～3年の保育士）

注：縦軸の単位は「%」、横軸は項目番号（表4・5参照）である。以下、図2～4も同様である。

たい項目において、管理職と各経験年数の保育士の差分が10%以上の項目をみると、経験年数が1～3年の保育士では、「子ども理解、子どもとの関わりに関すること」（-14.2%）、「遊びに関すること」（-12.8%）、「特別な配慮を必要とする子どもに関すること」（-11.0%）の3項目で保育士の方が高かった。4～9年の保育士では、「遊びに関すること」（-39.8%）、「子ども理解、子どもとの関わりに関すること」（-23.3%）、「保護者理解、

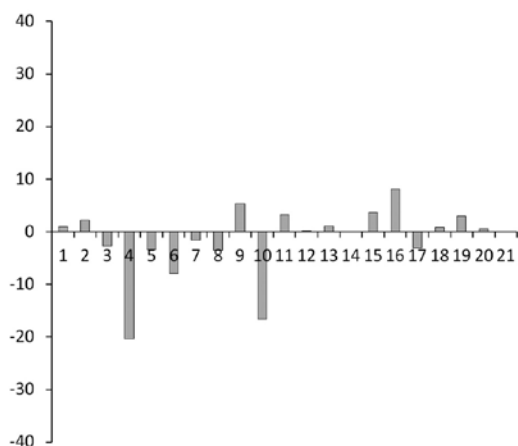


図3. 「現在身についている」×「受講してほしい・したい」における管理職と保育士の差分（経験年数が10年以上の保育士）

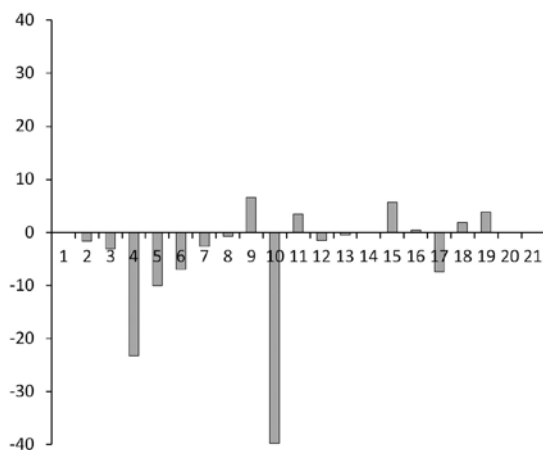


図2. 「現在身についている」×「受講してほしい・したい」における管理職と保育士の差分（経験年数が4～9年の保育士）

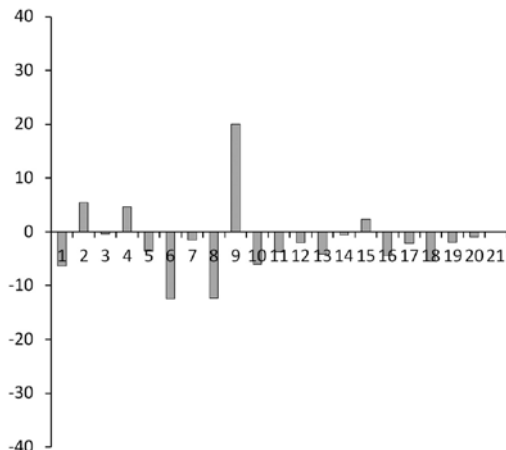


図4. 「現在不足している」×「受講してほしい・したい」における管理職と保育士の差分（経験年数が1～3年の保育士）

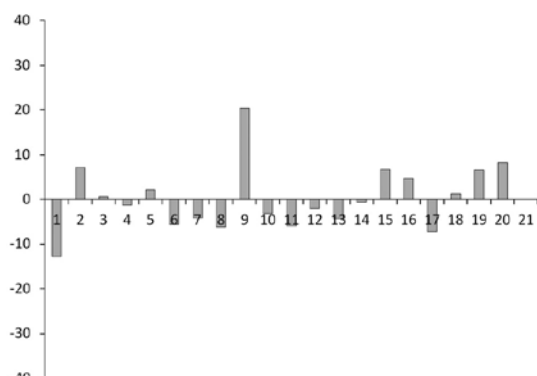


図5. 「現在不足している」×「受講してほしい・したい」における管理職と保育士の差分（経験年数が4～9年の保育士）

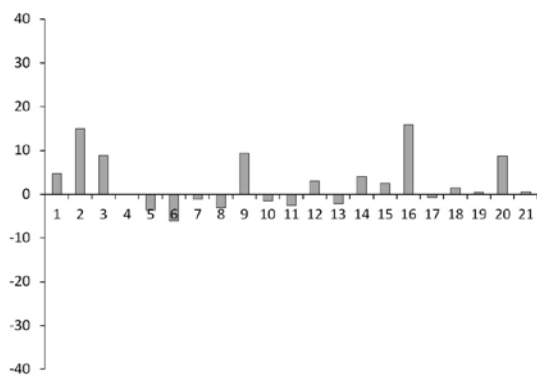


図6. 「現在不足している」×「受講してほしい・したい」における管理職と保育士の差分（経験年数が10年以上の保育士）

親との関わり方に関すること」(-10.1%)の3項目で保育士の方が高かった。10年以上の保育士では、「子ども理解、子どもとの関わりに関すること」(-20.4%)、「遊びに関すること」(-16.6%)の2項目で保育士の方が高かった。

現在不足していて、かつ受講してほしい・受講したい項目において、管理職と各経験年数の保育士の差分が10%以上の項目をみると、経験年数が1～3年の保育士では、「特別な配慮を必要とする子どもに関すること」(-12.4%)、「保健や病気に関すること」(-12.3%)の2項目で保育士の方が高く、「安全管理や危機対応に関すること」(20.0%)の1項目で管理職の方が高かった。4～9年の保育士では、「保育に関する法制度や施策」(-12.7%)の1項目で保育士の方が高く、「安全管理や危

機対応に関すること」(20.5%)の1項目で管理職の方が高かった。10年以上の保育士では、「リーダーシップに関すること」(15.9%)、「保育の意義や理念、保育所の社会的役割」(15.0%)の2項目で管理職の方が高かった。

5. 考 察

1) 経験年数別にみる保育士の資質・能力

おおまかな傾向としては、経験年数にかかわらず、保育士からみても、管理職からみても「遊び」や「子ども理解、子どもとの関わり方」については、身につけている資質・能力であると評価していることが明らかになった。一方、不足していると評価される資質・能力は、経験年数にかかわらず、保育士からみても管理職からみても、「保育に関する法制度や施策」であることが示された。つまり、保育士の評価と管理職からの評価の共通点として捉えることができるだろう。

現在身につけていると評価する資質・能力と現在不足していると評価する資質・能力を比較すると、管理職と保育士ともに、不足していると感じる資質・能力は経験年数が高くなると選択率が高くなっていた。つまり、管理職が保育士を評価する場合も、保育士が自分を評価する場合も、経験年数を積むことによって、不足している資質・能力が明確になると考えられる。一方、管理職においては、保育士に対して現在身につけていると評価する資質・能力は、経験年数が高くなると、選択率が低くなっていた。つまり、管理職が保育士を評価する場合、経験年数が少ない保育士の方が身につけている資質・能力を評価しやすく、経験年数を積むことによって、身につけている資質・能力が多様化する、あるいは評価のレベルが高くなるのかもしれない。

2) 経験年数別にみる保育士が希望する研修と管理職が求める研修

本研究では、保育士自身が自分をどのように評価しているか、かつ管理職が保育士をどのように評価しているかによる、保育士の研修への影響を検討した。研修に対して求める意識として、自己

評価あるいは他者評価によって「現在身についている資質や能力」をさらに伸ばすために研修を受講するという考え方と、「現在不足している資質・能力」を補うために研修を受講するという考え方に着目した。

その結果、全体的な傾向として、現在身についている資質・能力をさらに伸ばすための研修という意識は、経験年数が1～3年と4～9年において管理職と保育士の間に相違がみられ、10年以上においては同様の傾向がみられた。さらに、管理職よりも保育士の方がより「身についている資質・能力を伸ばしたい」という意識が強い可能性が見出された。

現在不足している資質・能力を補うための研修という意識も、経験年数が1～3年と4～9年において管理職と保育士の間に相違がみられ、10年以上においては同様の傾向がみられた。さらに、保育士よりも管理職の方が「不足している資質・能力を補うための研修」という意識が高い傾向が捉えられた。

6. まとめ

本研究では、研修を段階的・体系的に捉える一指標として経験年数に着目し、管理職と保育士の研修に対する意識の違いを検討した。その結果、

保育士の資質・能力に対する意識にしても、研修に対する意識や研修に求める内容にしても、管理職と保育士との間でおおまかには共通している点が見出されたが、経験年数別にみると10年を区切りに異なる可能性も示唆された。

今後は、保育士の経験年数に対する意識（過去、現在、未来の自分自身をどう捉えるか、など）の調査等を加え、段階的・体系的な保育士の資質向上につながる研修をさらに明確化している取り組みが必要だと考える。

引用文献

- 野坂勉，荻須隆雄，須永進，門倉文子，中村美喜子，若山望（2006）保育士の資質向上に関する調査研究，日本保育協会報告書。
- 若山望（2008）保育者としての資質・能力の熟達に関する調査研究，日本保育士協会調査研究部報告書。

付 記

本研究は、平成26年度保育科学研究「保育士の経験年数別研修プログラムに関する研究」（代表者：青井夕貴）の一部を再分析、加筆・修正したものである。